

外国人児童の文法的適格性の発達

—作文の縦断調査から—

工藤聖子（東京学芸大学大学院修了者）・濱久保美幸（東京学芸大学大学院院生）
齋藤ひろみ（東京学芸大学）

1 研究背景と目的

日本で生まれ育った外国人児童（日本生育外国人児童）の言語教育においては読み書きの発達が課題とされる。本調査では、その一側面として文法面での適格性の発達に焦点を当てて、書く力の発達の様相を描くことを目的とする。本研究では、1文内の文法的適格性を中心に、文構造との関わりで助詞に、文法的意味に関しては語形変化に着目して、縦断的に分析し、文法的適格性をどのように獲得していくのかを探っている。

外国人幼児の習得過程では、場所を表す「に」と「で」の混用（久野 2003）や、活用形式を接辞のように利用する（橋本 2006）時期があるという。一方、日本人児童生徒の作文においても、主述の整合性、理由表現の文末の整合性、主題表現に関わる「は」と「が」の選択、述語と格助詞との関係などに課題が見られたという（伊坂 2012,2013）。

本研究では小学生 69 名（日本生育外国人児童 F48 名（幼児期来日の 4 名を含む）と日本人児童 J21 名）の、2～6 年の作文 345 件を分析する。作文は指導を入れずに 45 分以内で書いた「遠足」をテーマにした「出来事作文」である。特に、助詞と語形変化（本発表では活用形式と呼ぶことにする）に焦点化し、その誤りの分析から文法面の発達について検討する。

2 分析方法

作文に 1 件ずつ当たり、文法の誤りを、文構造及び文法的意味に関わる「文法の誤り」と、語の選択の誤りや話しことば使用等の「周辺の誤り」を抽出した（詳しくはポスターで）。

文法の誤り	助詞の誤り（脱落、交替、余分）、活用形式の誤り、テンス・アスペクトの誤り他
周辺の誤り	「ある⇔いる」等の誤選択、縮約形「ちゃう」や口語表現「あんま」等の使用他

「文法の誤り」は、形式面での誤りを全て拾い上げた後、表記ミスと考えられる誤り（助詞「は」を「わ」と表記、用言の活用形の促音の脱落等）とに区別して分析を行った。なお、「周辺の誤り」は、「文法の誤り」の出現状況の解釈時に、参照する程度の扱いとする。

分析は、まず、児童別の学年別誤り出現数、「平均出現数（以下、出現数）」（各学年の総文節数で誤り数を調整し、誤り数を作文数で割った）から、F と J の比較、学年による変化を捉える。次に、出現数の多かった助詞と活用形式の誤りについて、FJ の児童別に質的に分析を行う。

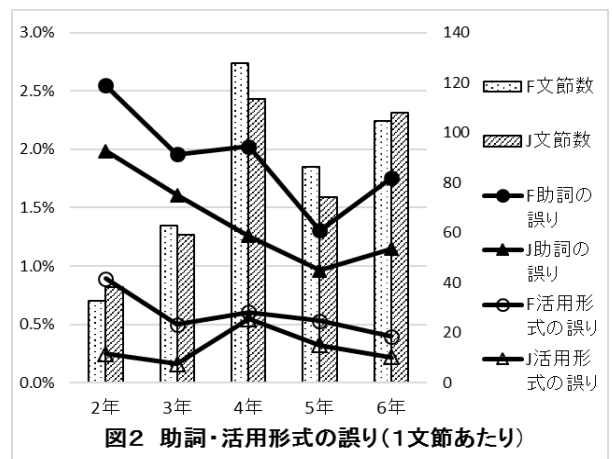
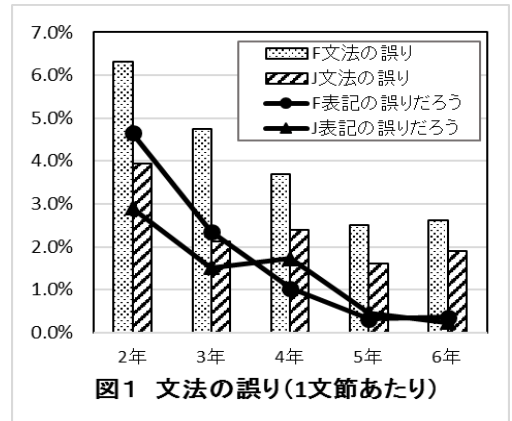
3 分析結果

「文法の誤り」の出現率（1 文節当たりの誤りの平均＝誤り数÷文節数÷児童数）を見ると、全学年において F 作文に J よりも多く誤りが見られる（図 1）。文法面の適格性について、J が中学年から安定化するが、F は高学年までかけて徐々に獲得する様子が見取れる。一方、表記

ミスと考えられる誤りの出現率は、高学年でFとJとの間に違いはなくなっている。図2に、一文節当たりの助詞と活用形式の誤りの出現率、および平均文節を示す(右の目盛りは文節数)。

助詞に関しては、Fは正確さを高めつつも中学年以降は産出量・複雑さの影響が見られる。Jは産出量に関係なく高学年で助詞の選択については一定の適格さを獲得している。ケース1は、6年のF作文(助詞の誤りが6箇所)の誤り例である。Aは場所の「を」、Bは範囲の「で」との選択の誤り、Cは「と」あるいは「で」の脱落である。同学年のJ作文では主格助詞の脱落があるが、類似の誤りは見られない。

活用形式の誤りは、2~3年でFがJに比べて高いが、4年以降は差が小さくなっている。ケース2は5年のF作文(9箇所に活用形式の誤り)の誤り例である。形容詞過去の形式が2通り見られる。6年ではこの児童は「かわいかったです」を使っている。複数の形式の使用が、活用形式を習得する過程の特徴といえそうである。



ケース1 6年時の作文の助詞の誤り例
 A スペリタイに4かいぐらいスペリました。
 B 今までの一ぱん楽しかったです。
 C みんな 楽しくあそべてよかったです。

ケース2 5年作文の活用形式の誤り例
 D いたいでした。
 E おいしいかったです。
 F 1日だったです。

4 おわりに

数量的に捉えた結果を中心に示したが、全体としては、Jが中学年から文法的適格性に安定化が見えてくるが、Fはその速度が遅いと言えそうである。ただし、個人差が大きく、ケースで紹介したように、質的に見る必要がある。ポスターでは質的に分析した結果をさらに紹介する。

【引用文献】

伊坂淳一 (2012) 「中学生の日本語表現における文法的不適格性の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻、pp.63-71
 (2013) 「小学校高学年児童の日本語表現における文法的適格性の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第61巻、pp.15-22
 久野美津子 (2003) 「ブラジル人幼児の場所表現「に」と「で」の習得過程」『日本語教育』117号、日本語教育学会、pp.83-92
 橋本ゆかり (2006) 「幼児の第二言語としての動詞形の習得プロセス--スキーマ生成に基づく言語構造の発達」『第二言語としての日本語の習得研究』9号、pp.23-40、第二言語習得研究会

